

◆【海員随想】海員日記① 下尾孝晴

海員日記をつけはじめて18年になる。ということは、船に乗ったときからつけ始めたことになる。初めのころの日記を読んでも、それは日記ではなく、漁獲日報的なものである。そのころはまだ飯炊きになったばかりで、長崎入港なんて文字が目に入ると、ああ、あの時は雪のチラチラ降る時で、ベソをかきながら飯を炊いたことが思い出される。

それから少したって、そう20歳ごろの日記を読むと、これまた面白いことに、毎日が怒られっぱなし。なんでこうまで怒られにやならなかったかと思うほどで、その怒られた理由が、怒った相手の言葉そのままに記してある。その理由も、なんでそれくらいのことわからなかったのかと、やはり操機手として実力のなかった自分が反省させられる。

いま読み返すと、全く自分自身を知らされる思いで、恥ずかしいやらなんやら、一人照れなければならない。もちろん彼女のこと、初恋のこと、そしてフラレたこと、自分で書いたせいか、その十幾冊の日記のひとつひとつが、そのページをめくると、きのうのように思い出される。

でも、一時、この海員日記をやめた時期がある。それは、オソレオオクモたいそう偉い志を抱いて、中卒の私が甲免を受けようと考えたときである。

結局、こうした日記なにがしをつけることは、自分自身の不満を活字として書き、書くことにより自分自身の不満を発散しているにすぎないと考えたからである。また、下手をすると、ヘンな文学にかぶれ、自分の能力のなさを文によってカムフラージュしようとする自分の心底を垣間見たような気がしたからである。そう考えたとき、ヘンな活字いっさいを捨てるためにも日記をやめ、そして持っていた文学全集うんぬんなんてのは、全部レックしてしまい、操機手として怒られる不満、くやしさを胸に秘めて、難解不問の勉強とやらをボチボチ始めたのである。

それから数年、かろうじてエンジニアとしての道を歩いているときも日記はつけなかった。いったんやめると、この日記というものはまた、なかなかつけにくいもので、なに一つ変化のない単調切実な航海では、いったい何を書いたらよいものやら、考えれば考えるほど気の重くなることである。

「海員だより」